

門 5
號 332
卷 3

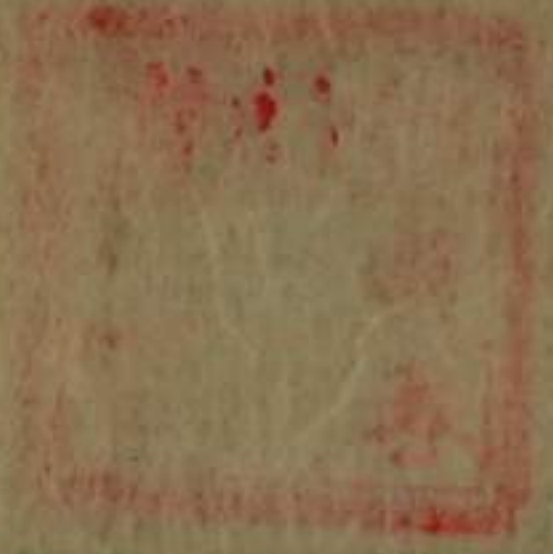
13
332
3

面影壯子卷之三目錄

彭顏天壽
金鐵論
石臼生死

順逆兩忘

明治三十六年七月十三日
東京市大久保
餘町百
坪内研丸
氏寄贈



面影莊子卷之五目録

外

面影莊子卷之五

○ 彭祖文壽



彭祖八百歳にて死し 叔回は七十二才にて
死しを神靈途中に命を授けり 彭祖は
孔子の弟子の中に十哲の第一に名を
孔門の道統を承継するものなり 明道
学に精神を繫ぎ 一生孔子を附するりて

司馬桓雅が曲に胸をいして先陳蔡の難
 所計の咎物をく至用の賢人をして書氣
 ろけを去るべ不佞や天にをくし其上孔
 子の弟子れ中にも子貢の賢者也洪と東
 憲一人の富子の賢人也其もい人今も世
 とも多きなり其をいんそ其洪と東憲の
 一處に引おられかのづゝ窮鬼の先祖とある
 事記後事での恥辱ありとわぬい其氣乃

洪をいりし多精神を收先放と洞練して
 地仙とちり八百歳の壽命を保てり洪が賢
 人をいし後命しそ其を用り事也教が云
 洪が忠を解てとるにべしそ其天下の實
 ところののの軀命也貴ぶ所ののの面
 也倚る所ののの足耳用也骨背四肢の
 二用一深に含とるそのあり洪くもことある
 や又地の長久あり放と氣と成りつての

汝が八百歳を我と十二とて眞に即乃時より
入るもば小児の如くは世の寂寂の事物
に壽命を得ず人にも属せられぬ也何ぞ又
ふも萬世とて八百歳乃自慢片服いとも
あり自己の天徳を感ずるに於て
相應に思ふ事ありありあり一寂然
として遂に万像に通ずるも莊子が徳を
符の意味也と論ト終る別を去

○金鐵論功

五金の首は黄金大英人嚴南英條乃胡
宛に於て國産の鉄に謂て之天地乃万物
人畜を初とて一魚鳥虫介の微物に
もて各其類に於て部を分ち殊族を
別して三百六十種とて一類毎に首を
其類族と成て一ひと古人の定む

不^まろ^ろり^ろ然^ん中^{ちゆう}我^{われ}し^しが^が珠^{しゆ}類^{るい}の^の金^{きん}銀^{ぎん}銅^{どう}鉄^{てつ}鉛^{えん}と
 五^ご金^{ごん}と^と其^{その}木^のの^の金^{きん}物^{ぶつ}と^と約^{やく}先^{せん}ら^ら我^{われ}ハ
 五^ご金^{ごん}乃^の首^{しゆ}ら^らの^の以^も非^ひず^ず七^{しち}珠^{しゆ}万^{まん}寶^{ぼう}の^の長^{ちやう}
 一^{いつ}年^{ねん}我^{われ}に^に勝^{まさ}れ^れ物^{ぶつ}も^もれ^れ一^{いつ}文^{ぶん}竺^{しやく}と^とく^く
 之^{その}獲^と伏^{ふく}羅^らと^と名^な付^{つけ}仏^{ぶつ}友^{ゆう}に^に文^{ぶん}眞^{しん}と^と珠^{しゆ}一^{いつ}あ^あ
 長^{ちやう}璽^し録^{ろく}し^しら^ら我^{われ}美^みら^らの^の名^なち^ちら^ら仏^{ぶつ}の^の肌^{かわ}
 一^{いつ}く^くへ^へて^てハ^ハ紫^{むらさ}磨^ら茨^{あざ}金^{きん}と^と一^{いつ}八^{はち}功^{こう}徳^{とく}池^ちの^の砂^{すな}
 一^{いつ}我^{われ}ち^ちら^らら^らわ^わど^ど貴^{たか}に^に我^{われ}件^{けん}同^{どう}に^に汝^にが^が如^{ごと}く

信^{しん}姓^{せい}郡^{ぐん}く^く色^{しき}悪^{あく}く^く心^{こころ}く^くま^まあ^あく^く柔^な我^{われ}ら^ら
 ず^ず中^{ちゆう}く^く金^{きん}に^にハ^ハ似^にも^も付^{つけ}ぬ^ぬの^のを^をあ^あと^とて^て古^こ人^{にん}ハ
 五^ご金^{ごん}乃^の類^{るい}に^に一^{いつ}く^くら^らど^ど合^あえ^えの^の形^{かたち}ぬ^ぬま^まち^ちら^ら
 む^むれ^れ古^こ人^{にん}ハ^ハ汝^にを^をら^らと^とて^て五^ご金^{ごん}の^の部^ぶ類^{るい}に^に入^いれ
 世^よい^いく^くあ^あく^くと^とく^く我^{われ}ら^ら件^{けん}同^{どう}乃^の形^{かたち}け^けら^らと^とは^は今
 一^{いつ}の^の五^ご金^{ごん}の^の部^ぶ類^{るい}を^を宥^なせ^せ鉄^{てつ}が^がえ^え汝^にの^の性^{せい}質^{しつ}
 美^みち^ちら^らを^を自^{みづか}負^かし^して^て某^{たが}が^が票^{ひょう}文^{ぶん}ハ^ハ野^の郡^{ぐん}の^の
 と^と屬^{ぞく}し^し古^こ人^{にん}の^の定^{さだ}ま^まら^ら五^ご金^{ごん}の^の部^ぶ類^{るい}と^と今^{いま}文



近んしむの都程ちりけしむ付らるる色乃洪也
 矣らるるをりつてちりけしむ付らるる色乃洪也
 銀ハ白く知へ赤く鉄の流るるも金
 く金に類せば洪への其流るるも金
 を腐し悪じの何ぞや金が云はれる金
 乃内也銀を白金と名付銅と赤金と鉄
 銀を金公とも青金ともしる金の名
 を得らる洪と一類にいふや鉄が云はれる

と金の名を得る方に非ず其も黒金といふ
 金とも名づ、金が云はるる五金の部を別
 にしる事あらざらん洪も金の名をわたりし
 とらども禹貢の之品に金銀銅を用いし
 事ど洪を用いし事をえられし事下ん
 下客して貢物に堪ざる非ざるや鉄炭膏と
 しる事あらざらん物乃妍媸善悪乃質
 日トかぶるる自然の性也妍とりの好も

そのによつて美藤の名を得悪人に對し
 て善人の名を恥す世間をめぐて妍とま
 のもろば其美との名をめぐりうこれそ
 得す善人のもろば善と指下あり海
 老子の云悪人の善人の質とこれあり妍
 善悪の自然の對待して日に對し一月
 あり晝に對して夜あり陽の陰によつて陽
 の徳を恥はけ懼によつて是れ其某が如く

色よく野鄙下劣の物ありによつて汝の金徳
 とありあつれば汝の徳を恥れものゝ恥ありゆへ
 ちり世間人の玉を採りて多に撲連夜
 光の明珠を採りにあつて玉のそま
 して對して下劣の物ありによつて及く
 玉の徳を失ふに似たり汝の才より万化の
 ごとくを失ふと愛と判と化と大判と女
 世間を通用して美窮と判の剛を愛と乃

大徳某が企乃ふ所に非ず志りもは紙を小
 しての十刀某乃刀執に男を賣とて大あり
 てハ陰謀刀と化して強敵を征一罪あり志
 を依一天下國家の不慮に依てを卒此功
 としてとまの世の乃りぬ取をり世をりて刀
 に造り銀執ふ作りとも某がどく割截の用
 にいまは古より和漢の名銀まうとてとを
 某ど金にて造り一とまたり一取詮物を切此

役にまがれは也こそ世の不能自強の性質
 にて某より劣新以たりとわ志りるは世の
 貴も貴に止海す某が賤も賤に終はは
 いしとらとらとていば金文に返言たり

○石臼生記

豆腐石臼に謂て云又地乃間に死ぶるもの
 ありや石臼が云又地の万物死せざる物あり

一 孤身いさみの生なまあつて死しき火ひに入いつて秋あきを
 滅うせず水みづふ入いつて扶たすでだ土つちに埋うめてと朽く
 と壽命しゅめいを大地ちと共ともして万代ばんたい不易ふぎの性しやう
 を得えたり汝ながごとく脱物だつぶつに非あらだ不ふ死しの物ものと
 ついに我われを命いのちに離はなれしと誰たれもあらずと豆腐とうふが土つちに
 生なま死しあり木き芝しばが書かに生なまじて朝あさふ死しし
 槿あざな花はなが日ひ漬ひを待まちぬよりと種こゝろと土つち汝なが命いのち也
 生なまも死しもあらず知ちりもくも意識いしきもくも勤こゝろりも
 一 死しに體たいにて養やしなうるものなりと石いし臼うすが云いふ
 我われ幸さい徳とくの塊かたまりくくくろ小石こいしなり幸さい経きやうりよ
 志しとがしけしと大おほ磐石いしとあり我われれば我われ
 死し物ものに非あらず今いま石いし臼うすとありても引ひ廻まわさる
 て勤こゝろ働はたらく也汝なが物ものを勤こゝろり守まもり勤こゝろらばとらよぞ
 豆腐とうふが云いふ汝なが生なまれとるをりつて死し物ものにあつ
 たりとらよとるもつとら也我われれ石いし臼うすと
 汝なが勤こゝろり人ひとなりよ引ひまされて勤こゝろり

一 死しに體たいにて養やしなうるものなりと石いし臼うすが云いふ
 我われ幸さい徳とくの塊かたまりくくくろ小石こいしなり幸さい経きやうりよ
 志しとがしけしと大おほ磐石いしとあり我われれば我われ
 死し物ものに非あらず今いま石いし臼うすとありても引ひ廻まわさる
 て勤こゝろ働はたらく也汝なが物ものを勤こゝろり守まもり勤こゝろらばとらよぞ
 豆腐とうふが云いふ汝なが生なまれとるをりつて死し物ものにあつ
 たりとらよとるもつとら也我われれ石いし臼うすと
 汝なが勤こゝろり人ひとなりよ引ひまされて勤こゝろり

こゝに別人の心識の動くや汝が動くに非
 ば 汝はふも死ありとらふ其の如く石臼に水
 ころが徒接ありとこそいふんこゝに汝が心
 の候にて土中不埋りれど其の形の時を生かす
 べりも世に石臼と水入りの石臼を説くもの
 て云能換樞をもちて自然の性を換へ破
 らもて死とる也故に石臼石臼を説く
 繋ぎ生かすも死とるもすかすもこそ自然の生

氣を濁して死とる也汝に色死を述れざる
 事明白なるもとわさるも生かすの晝夜は
 子の愛に生じて死ふ死すこれ時刻乃生か
 也日の朝に生じて昏に没にこそ一日の生死
 ありまのみに生じて愛に死すこそ四季の
 生死也万物の死乃道を得又の命とこそ
 生じての善悪ぶつて死しての善悪二つあり
 て自然に後死福ありて独海の誰りこそ

西園抄 卷之三

十七

を微し易に之始を原す終に及れ故に
 生れの従と知ると孔子の之を朝に
 道と因て夕に死とす可也孟子此を
 壽貳に身を脩す命と俟命の之を
 一後一様の若とあんとす皆生れ
 乃的を破す天命自然の道を自得する
 意ちる石印が道といふやうなる物を
 腐が云道といふもあつても書かす道

に非ず道といふが物もこれ痛くして道
 非に道聴く物もこれ痛くして道に
 非ず聴く物もこれ痛くして道に非ず
 道といふが物もこれ痛くして道に
 非ず聴く物もこれ痛くして道に非ず
 道といふが物もこれ痛くして道に
 非ず聴く物もこれ痛くして道に非ず
 道といふが物もこれ痛くして道に
 非ず聴く物もこれ痛くして道に非ず
 道といふが物もこれ痛くして道に
 非ず聴く物もこれ痛くして道に非ず

伴もたれいも非ず自然の文字師也
不生不死の存体也天地の万物同一氣に出
同一氣に入出の石も一も破我の豆腐もれが服
邪もろちんり汝が破の汝も去るに我邪もろ本
の我も去るす微心分別の知る亦に非され
の自然に委て止るも我もろ文字師の意味也

○順送函忘

念柳子然の一字をもらって一生の交用とす
最においては汝が平生交用とる然の字は
義理のいふ念柳子が然の去るがは送る
ざるを道とす割りののちやとく柔りたる
物の形も易し柳の枝に香おのりたる
割にも非ず柔りたるにもしもは然の道
をもらって送ざるゆ也我に送るものり
對しては然の道をもらって送されれば送



○面景十七の春景

一途よりして然る道に害あり一万余の
 上に付る事然るも此物と送り守送されば
 幸いあり一幸いありも人に振らる事す
 一生平安穏一して一生身を全に然るの
 一字を多用とらん此ゆかりに夜公ぬの云
 が生涯の多用もろろ極ちりまうも一
 事ごとくさるる事ありとて此の送に對する
 のり名也水火善悪の對待とらんがごとく

母の執事して送を悪むに心あり此送ふ
 一途よりして送を悪むに心あり此送ふ
 万の送の情事を元よ本本然るも送も
 自ら事と自得して然る字に然るも
 自然の徳を脱するのちさす此送を是
 非との心病と然る法すべしと存
 此所謂不思善不思悪の旨と一轉あり
 此の野りふにたがうて此と事とらん人々風

を悪く花のぬに送たりし守志うも
 風ハ殺戮の役人ちり色ざれたぬに送たり
 として吹むれも赤びくもこれをおとる時ハ
 送也とりども冬帯柄を兼て夏乃悪氣
 酷しき時ハ細涼の庭に風と息ハ加圍り
 折れあらず男のぬふぬ也し守決捨文斜
 の月を弄さる人ハ村を去る送也として悪
 鬼ども村雲ハ雪の役人あればと又夜中り

として遠くへ出むれぬに志うも世
 軒舷の折りぬ雲元ふり端に面と一ふと
 いのや皇天乃加祐を得る心地にこそ月
 への送也として悪む村雲ハ軒舷の時ハ
 守志あらずぬに非に送也送に非に
 舟送乃音伴つづきぬに於てとふりんや
 月ハ蓋をぬく一夜を送る一月の二夜をぬ
 くと一蓋を送るとるに似ては日月と色

には船送ふ心ありぬに船送の名ハ人の名
 付りあたり思ふも船益ハ井戸を鑿金て
 水乃利を教へ燧人氏ハ石を鑽て火を元
 乃道を教へ食を煖湯を沸も水火此利
 用大にして皆こもに利らるも船伯ハ
 水をもつて越の味を授け坐置卓ハ火
 りつて漢室を焚捨らる水ハ船益のよに在
 てハ船とちり船伯に在てハ送らる火も燧

人氏に在るハ船とちり坐置卓にありて
 送らるも船とちり水火船を船送するも
 や船送ハ人の心より製造する物あり
 洪明送是非を心に造らる船中明
 りあり鏡乃り傾相をも送へ守送相をも
 送らる万像を止るも帝に悠然とんぬ

面鏡花子巻之三 終

